

… はなの村の四季 …

花のような緋紅色のピラカンサの実

付近がほとんど落葉しているのにピラカンサは真っ赤な色の実をたくさん付けて枝から零れ落ちそうになっていた。このピラカンサの木は初夏には、沢山の白色の小花が枝一杯に咲き、それが盛夏になると青い小玉に結実、晩秋からは鮮やかな真っ赤な実になる。

原産はヨーロッパ南部から西アジアであるが中国など東アジアにも広く分布している。日本に入ってきたのは二十世紀初め頃と比較的に最近のことらしい。日本では「トキワサンザシ」または「たちばなもどき」をピラカンサとしているが、何れも同属のものを含めピラカンサと総称しているようだ。この木は別にピラカンサス、ピラカンタともいう人もいるが、バラ科の常緑低木で当地には実に多い。 **写真は11/21 葛が丘のある家の軒先で撮影**



小 関 栄

ピラカンサの名前の由来は、ギリシャ語の「Pyro(炎)+cantha(刺)」、炎のような真っ赤な実を付け枝には刺のある木というのが語源。英語名でも Fire-thorn(火の刺)であり、中国でも「火棘(クワヰ)」、何れもこの木の特徴から名づけられている。

花言葉も、花よりも木の実を愛でて「燃ゆる想い」「愛嬌、美しさはあなたの魅力」であり、また「慈悲」であるとは面白い。

寒さにも 燃ゆる想いの ピラカンサ 淡水

千 客 万 来



(写真は「倉馬の里」を訪れた愛知報徳会の皆さん)

- 10月6日 愛知報徳会ご一行30名が「倉馬の里」を訪問しました。この7月、全国報徳団体連絡協議会の会長に、愛知報徳会の尾島輝雄氏が選任されて以降、精力的に会員団体を訪問し、連携強化に注力されていますがその一環として今回訪問を受けたもの。ご一行は宮城前会長がほぼ一人でこの「倉馬の里」を開墾した当時の説明に熱心に耳を傾けていました。このあと大日本報徳社を見学しました。

- 11月6日 田園調布学園大学の前学長井上氏と前事務長大高氏の訪問を受けました。井上氏は伊藤公博氏と小学校時代の同窓であり「学園花の村」の支援者であられた故林佐智子先生の共通の教え子という縁もあり、かつ大高氏はそこに果樹や野菜・お茶などを栽培したいとの希望もあり事前勉強のため今回の訪問に及んだもの。「倉馬の里」を案内したあと大日本報徳社を見学、宮川専務さんから丁寧でわかりやすい説明を受けました。今後当大学とのパイプを大事にし若者との交流の輪を広げていけたらと願っています。